
守護霊

廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護霊

【Nコード】

N9214D

【作者名】

廉

【あらすじ】

大学生の直樹の前に、突然自分を守護霊の山田だと名乗る少年が現れた。彼は、守護霊のいないある少女を10日間守れと言う。その日から、直樹の生活が一変した。はたして、直樹は少女を守ることができるのだろうか。そして、10日たって初めて明かされた守護霊山田の秘密とは……

第1章 守護霊現る

基本的には、非科学的なことは信用していなかった。

テレビで放送されていた心靈写真も合成だと思いついて、ミステリーサークルだって人間の手によって作られたものだと思っていた。UFOなんてもつてのほかだ。

20年間生きてきて、その考えで不自由したことはなかった。それならば、目の前にいるこいつは何なのだろうか。

最初は大学の喫煙所で煙草たばこを吸っただけだった。しばらくすると、吐き出された白い煙の中にぼんやりとだが何かか形作られていった。そして、最終的にははっきりとした人間が目の前に現れたのだ。

「ケムいんだよ」

開口一番がそれだった。10代後半くらいの男にしては大きく見える瞳、茶色に染められた髪、黒いパーカーにジーパンというラフな出で立ちの少年(?)がそこに立っている。いや、正確に言えば宙に浮いている。

「よお、高宮直樹。いつも一緒だけど、こうやって話すのは初めてだな」

なんだコイツ……。危うく加えていた吸いかけの煙草を落とすてしまうところだった。自分の名前を知られているうえに、いつも一緒と言いやがった。こういうのを物好きなストーカーっていうのかと直樹は口をばくばくとさせながら考えた。

「お前……誰だよ」

ようやく出た言葉がそれだった。

「俺？お前の守護霊だ。名前は山田」

頭までおかしくなっているらしい。普段ならばそれで解決できるところなのだが、地面にその少年の足がついていないのを直樹は見過ごすことができなかった。試しに左手を伸ばしてみる。少年の左

肩に触れるつもりでいた。しかし、直樹の左手は何かに触れることなく少年の肩を貫通してしまった。

「ユーレーかよ!?!」

「ちっげーよ! 守護霊だっつってんだろ! 物わかり悪すぎるぞ!」
「そんなんいるわけねえだろ! 今までだっつて1度も見たことねえし!」

灰皿にまだ長かった煙草を押さえつけて怒鳴りつける。もうすぐ次の授業が始まってしまふからこれで終わりにするつもりでいた。

「じゃ・・見れば納得するんだな」

その少年は怯まなかつた。むしろ、子供のようにニツと笑って、何を思ったのかパーカーの下に隠れていたペンダントを手を取った。それを直樹の目の前にぐいっと差し出した。

「何だよ」

「いいから。これ持ってみて」

触れるのかと思いつながら手を伸ばすと、確かな感触を感じた。途端に視界に映るものすべてが一変した。

まず喫煙所にいる学生の数が増えた。いや、正確に言えば元々いた学生1人につき1人ずつ宙に浮いた幽霊が取っ付いているのだ。目が合うと、なぜか手を振ってきたり、会釈をされたりする。それから、プラスアルファで幽霊があちこちでうろつろつとしてる。

「な? これで俺の言ってること信じるよな? ちなみに見えるのはほとんどが守護霊だよ。たまに違うのも混じってるけど、まあ気にすんな」

自称山田が直樹の手からペンダントを取り返すと、元の光景に戻った。

直樹は何も言えずにいた。まさかこの世にこんな非科学的なことが存在するなんて思ってもみなかった。守護霊を信じるわけではないが、この少年がただの頭がおかしくなったストーカー男ではないことはわかった。

山田はベンチにすくとんと座る。宙に浮いているくせに、ベンチに

は座れるらしい。

「まあ聞いてくれ。こないだ俺守護霊選手権でチャンピオンになっちまってよー、その才能を見込まれてかちよつとした面倒な仕事を押し付けられちまった。そいつを片付けるためには直樹の協力がないとできないんだ。だから頼むぜ」

口をぽかんと開けたまま直樹は固まってしまった。

「意味わかんねー。お前1人でやりゃいいだろ」

「その仕事つてのが、今まで憑いてた守護霊に突然逃げられた人間を10日間守ることなんだ。直樹はそいつと接点がないから、俺がわざわざ姿を現して事情を説明してんだよ」

「つまりあれか。俺にその人間と仲良くなって10日間守れって言つてんだな？」

「まあそうなるかな」

「断る」

にべもなく言い放つと、山田の口の端がひくつと痙攣けいれんするのがわかった。立ち上がり、直樹は次の教室に行こうと木々に囲まれた喫煙所を後にしようとする。しかし、山田はやはり変だった。

「待てや。守護霊にはむかうと痛い目みるぜ」

言うやいなや、目の前の地面に上から灰皿が落下してきた。止まらなかつたら、今頃煙草の灰だらけである。2、3歩よろけると、今までいた所に木の枝がざくざくざくつとまるで矢のように突き刺さっている。さすがに顔から血の気が引くのを感じた。

よく見ると、山田から得体の知れないオーラが出ていることがわかり、慌てて直樹は、

「わかった！山田の言うとおりにする！だからもうやめろ！」

すぐに変なオーラの放出がなくなった。次はナイフでも飛んできかねないので、直樹としては冷や汗ものだった。

「そうか？さすが直樹だな！」

そのしてやつたり顔でしまったと思った。直樹は、最初から山田の手の内で踊らされていたのだった。

同じ市内に位置し、名門と呼ばれる女子高。直樹にとつては全く縁のなかつた高校に通う生徒こそが、今捜している原田聡美ちかみという人間だ。と言つてもまだ実物は見ていない。下校時刻に合わせて原田が出てくるのを待っているのだ。

しかし、女子高の正門近くのハンバーガーショップでキャピキャピした女子高生を眺めている大学生はなんて悲しいのだろうと思う。他の人には姿が見えない山田やまのが羨ましい。

「いた。あの子だ」

隣で山田が身を乗り出す。直樹もその目線を追つた。ちょうど地味で小柄な女子高生が足早に歩いていくところだった。

「おい。行くぞ」

「はあ？どこに？」

「決まつてんだろ。原田聡美とこだ」

まさか本当に地味なあの子高生が原田だとは思わなかつた。どうせならもつと派手でミニスカートの女子高生が良かった。

未練たらたらだったが、山田に連れられて直樹はショップを出た。

「あの・・・ちよつと今いいですか・・・」

まるでナンパのようだ。黒髪の短髪に眼鏡をかけた明らかに年上とわかる男性が、突然女子高生に話しかけるなんてナンパ目的以外に何があるのだろうか。散々迷つた拳句に、直樹がかけた言葉はこうなつた。山田が隣で「いつ世代のナンパだよ」とつぶやいているのが聞こえたが、無視をすることにする。

そして、予想通りの原田聡美の反応だった。彼女は警戒心むき出しの猫のようにたじろいで後ずさつた。

「あ・・・俺は怪しい者じゃなくて・・・えつと」

隣にいる山田に助けを求めると、しかし山田は車通りの多い道路を見て険しい顔をしている。

「おい、山田」

「あの黄色い車。酒気帯び運転だ。もうすぐここに突っ込んでくる」
小声での直樹の言葉を無視して、山田は1人つぶやく。何を言っ
てんだコイツと思いなから直樹も道路に目をやると、確かに黄色い
車が蛇行運転をしているのが見えた。

「あの、もういいですか」

少し不機嫌気味な原田聡美の声がしたが、直樹は答えることがで
きなかった。すでに黄色い車が猛スピードでこちらに向かってくる
からだ。こんなとき、映画だと主人公は間一髪で避けたりするの
かもしれない。しかし、今の直樹にはそんな芸当は到底不可能だった。
「直樹！聡美を守れ！！」

山田の声に反応して、直樹は無我夢中で聡美の頭を抱え込み、全
身で彼女の体をかばう。その直後に、何かがぶつかる音がした。

何が起きたのだろうか。おそろおそろ目を開けると、さっきまで
蛇行運転をしていた黄色い車がガードレールにぶつかっていた。あ
と少し右にずれていたら、ちょうどガードレールのない場所にいた
直樹たちにぶつかっていただろう。

自分の腕の中で何かが動く気配がして、直樹ははっとして力を抜
いた。原田が驚いた顔でその光景を見ている。

「声を出すなよ。俺は直樹にしか姿を見せれない。それに、今憑い
ている人間しか守れねえんだ」

声を出しそうになったが、やめておいた。何をしたのかはわから
ないが、たぶん山田は直樹たちを守ってくれたんだ。

「いいか。お前が聡美を守るんだ」

この日、直樹の生活が一変した。今まで不自由なことなく、非科
学的なことを経験することもなく生きてきた。しかし今日、大学の
喫煙所で煙草を吸っていたら守護霊に出会った。そして、守護霊に
会ったことのない人間を守れと言われてしまった。

おかしくなっているのは自分かもしれない。直樹はそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9214d/>

守護霊

2010年10月10日19時38分発行